

激動の経営

震災で一転窮地

日本熱源システムが原子力発電所向け事業に本腰を入れようと滋賀工場の建設を決断した矢先、東日本大震災と福島第一原発事故が発生した。工場の起工

日本熱源システム ③

式は震災発生後の3日後。社長の原田克彦は「先行きが見えない。建設を先送りしたい」と父で会長の昌彦に申し入れたが、昌彦は「ここまで来たらやるんだ」と工場建設を促した。2012年1月に工場は完成。しかし原発事業は前に進まず、受注は滞った。

未曾有の災害で日本熱源システムが再び窮地に立ったその前年、GEA社がレシプロ圧縮機メーカーで「酸化炭素(CO2)冷媒のノウハウを持つ独BO

CO2冷凍機、切り札に



CK(ボック)社(バーデン・ヴュルテンベルク州)を買収した。GEA社から「BOCK社の圧縮機でCO2冷媒機を作ってはどうか」と提案が舞い込

自ら独社で修習 昌彦は「いまさらレシプロ圧縮機とは」苦言を呈するも、BOCK社の工場を見て態

12年に独BOCK社で研修を受けた原田克彦(前列中央) 昌彦は「原発分野で受注が見込めず「従来の冷凍機事業に行き詰まりを感じていた」という。克彦には天の声を思え

低消費電力、評判呼ぶ

度を一変。「冷凍機の組み立てが一番難しい部分がちんとしてきていた。素晴らしい会社だった」と話す。克彦は「お客さんが買いやすいコストの低い中型や小型の冷凍機を作ろう」と決め、自ら技術者2人とドイツに滞在し基本技術を習得して帰国。滋賀工場に実験設備を作り、会社の命運をかけた開発に挑む。CO2冷媒は圧力が高く夏に効率が落ちる点を改善し、日本の猛暑に耐える製品にするため実証実験を繰り返した。試行錯誤して15年に完成したのが「CO2冷凍機スーパ

「グリーン」。現在の主力製品だ。 倉庫に売り込み 当初は什器メーカーと組んでスーパーへの納入を狙い、店舗の模擬設備まで滋賀工場に設置したが、売れたのは1台。スーパー関係者に「この業界は什器メーカーとしか話さない。冷凍機メーカーは影の存在」と言われた。そこで自ら主導権を握ろうと、16年から冷凍・冷蔵倉庫向け販売を強化。納入した東北地方の冷蔵倉庫から「消費電力が25%も下がった」と上々の評価を得た。

機会を得て冷蔵倉庫の団体が福岡県で開くセミナーの昼休みに飛び入りで冷凍機を紹介し、話を聞いた九州の会社が納入を決定。「九州の暑さに冷凍機が耐えられるか、大きなチャレンジだった」(克彦)が無事に稼働。冷凍食品工場の冷却ラインにも手を広げ順調に販売実績を積み上げた。 開発のためのドイツ訪問で得たのは技術だけではない。克彦は「一番の収穫はBOCK社の社員と毎晩食事をし、築いた強固な人間関係。現在の会社の基盤の一つ」と振り返る。(敬称略)